

アジアチャイルドサポート
代表理事

池間哲郎



part
②

あなたの夢は
なんですか？

そのとき少年は答えた。

僕の夢は人間に
なることです。

アジアチャイルドサポート

代表理事

池間哲郎

part

②

あなたの夢は
なんですか？

そのとき少年は答えた。

僕の夢は人間に
なることです。



著者プロフィール

池間哲郎（いけま・てつろう）

1954年沖縄生まれ。JAN（日本アジアネットワーク）代表者。NPO法人アジアチャイルドサポート代表理事。沖縄大学非常勤講師。沖縄市平和行政推進委員。おもにアジア（ベトナム、タイ、フィリピン、カンボジア、ミャンマー、モンゴル、他）のゴミ捨て場やスラム等の貧困地域を、撮影や支援のために足を運び、そこで見た貧しい人々の過酷な現状や、今日を必死で生きる子どもたちの姿に心を動かされる。私たちの「少しだけやさしい心」で、いかに多くの命が救われるかを実感し、講演、写真、ビデオ等を通して伝えている。2001年西日本銀行アジア貢献賞受賞。2003年琉球新報社社会活動賞受賞。2004年沖縄タイムス国際賞受賞。2005年地球倫理推進賞、文部科学大臣奨励賞受賞。著書に『あなたの夢はなんですか？ 私の夢は大人になるまで生きることです。』（致知出版社）他がある。

連絡先 〒904-2142 沖縄県沖縄市登川1584-1番地

JAN（日本アジアネットワーク）

電話 098-938-0099 FAX 098-929-1667

講演受付担当：池間理恵

携帯電話090-6858-2678

あなたの夢はなんですか？ Part②

僕の夢は人間になることです。

平成十八年七月四日第一刷発行

著者 池間哲郎

発行者 藤尾秀昭

発行所 致知出版社

〒107-0062 東京都港区南青山六の一の二十三

TEL (03) 3409-1563

印刷・製本 中央精版印刷

落丁・乱丁はお取替え致します。

（検印廃止）

©Tetsuro Ikema 2006 Printed in Japan

ISBN4-88474-748-8 C0095

ホームページ <http://www.chichi.co.jp>

Eメール books@chichi.co.jp

あなたの夢は何ですか？ part ②
僕の夢は人間になることです。

目次

【プロlogue】なぜ外国の子供たちを助けるの？

見てしまったから、知ってしまったから

11

かつて日本も外国から助けられました

14

人間になりたかった少年

16

【第一章】モンゴルのマンホールチルドレン

貧困が生み出したマンホールチルドレン

21

● 「僕を殴らないで」

● 「お腹がすいたよ」

● マンホールの少女たち

●「車を洗ったからお金をちょうだい」

●一枚のガムを分ける

こんなところで子育てはできない、でも…

32

【第二章】「沖縄の家」と「沖縄ハウス」

——アジアチャイルドサポートの活動

「仲間が暮らせる家をつくってください」

35

「沖縄の家」の子供たち

38

●ウラーナー「僕は立派な大人になります」

●チューター「私のすべてをあげます」

●ガントヤ「私の夢はお父さん、お母さんを幸せにすること」

●エルデネ「僕を捨てたお父さんに感謝します」

●サルチル「僕の夢は普通の暮らしをすること」

お母さんとマンホールで暮らします 43

「沖縄ハウス」とエルデネ先生 46

一番欲しいものは「お母さん」です 51

「私たちを追い出さないで」——十二歳の少女の必死の願い 53

「僕はなんとか生きていきます」——施設を出された少年の苦しみ 56

【第三章】ウランバートルの児童警察

ザハでの出来事 63

児童警察を訪ねる 67

「弟を生きていけるようにしてください」と訴えた少女 70

● 幼い姉と弟たちを襲った悲劇

● 施設を逃げ出したゲレルマー

● 「僕たちが守ります」

もうマンホールには戻れない 84

マンホールに暮らす大人たち 87

ダルハンの「沖縄マンション」 90

そこに命があるから 96

愛よりもお金——ボランティア活動の現実 99

【第四章】マンホールからバランクへ——ダルハンの現状

バランクⅡ「悪いものが集まる場所」とは 101

バランクマザーたちの必死の戦い 107

● 幼児を抱えてバランクで生きる母

● 「なんだ、お前は！」

● 「子供だけは助けてください」

● 「ここは人間の暮らす場所ではありません」

● 「自分は何も食べなくてもいい、子供だけは……」

ひ孫を育てるために生きる八十代の老夫婦 121

命を失う可能性がある子供が四十九名います 125

モンゴル事務所の開設 129

【第五章】 自立支援——モンゴル伝統芸能コンサート

ダルハン子供宮殿に学ぶ子供たち 131

恩返しコンサートの実現 133

観客を感動させた子供たちの素晴らしい演技 136

死んでもいいから舞台に立つ 138

「病原菌がうつりますから近づかないで」——校長の心ない一言

143

【第六章】ホームステイが生んだ感動のドラマ

引っぱりだこになったモンゴルの子供たち

147

モンゴルの子供から見た日本の子供

151

●勉強できることは幸せなこと

●「お兄さんを許さない」

●大人を尊敬するモンゴルの子供たち

初めて家族の愛にふれた喜び、そして感動

155

●「お母さん」と言えた少年

●「お母さんが汗を拭いてくれる」と涙を流した少年

●「僕は我慢します。仲間を抱いてあげて」

● 「ベッドで眠れることは幸せです」と泣いた少女

● 「本当にシャツを買ってもいいのですか」

ふれあいが日本の子供たちを成長させた 162

涙ナミダの送別会 164

モンゴル交流ツアー 166

● 立派な大人になることが恩返し

● 八月は希望の月

私にも、お父さん、お母さんをください 169

ホームステイの問題点 173

児童保護活動の最良の結果は必要とされないこと

【第七章】生きていく力と自信を育てる

ダルハン音楽学校の設立

178

子供たちに希望と自信を与えた日本公演

182

わがままな金持ちの息子ゾコーの変化

187

日本留学の夢に向かって努力の日々——ウーガナーとメンデ

190

【第八章】日本の中学生の思いに涙する子供たち

日本の中学生の募金活動に感動

196

日本の中学生、日本の家族への伝言

198

● ガンデイーのメッセージ

● エンへのメッセージ

● バターのメッセージ

● エンフトルのメッセージ

「僕は人間になることができました」 204

日本の中学生に伝わった子供たちの願い 206

【エピローグ】一生懸命に生きてほしい

変わったのは子供ではなく大人の姿勢 210

国際協力を通じた日本の子供たちの健全育成を目指す

気づいてほしい「一生懸命」の大切さ 214

継続こそ力 216

感謝が生きる原動力になる 219

212

● 装幀——川上 成夫

● 編集協力——柏木 孝之

【プロローグ】

なぜ外国の子供たちを助けるの？

見てしまったから、知ってしまったから

私は沖縄で生まれ育った五十二歳のおじさんです。結婚式などを撮影、編集するビデオ製作会社を経営する^{（カニエ）}かたわら、アジアの人々の支援活動が続けています。約十年間は個人的に活動を行っていましたが、一九九九年四月に、周りの声に押されて団体（当時はNGO沖縄、名称変更をして現在はアジアチャイルドサポート）を設立しま

した。現在、タイ、モンゴル、ミャンマー、カンボジアにおいて、学校、児童保護施設、障害者農業支援センター、ハンセン病患者用住宅、井戸建設などの支援事業を行っています。

「地方の小さな団体では何もできない」「世界的な大きな団体だからこそ国際協力は可能だ」と言われたことも何度かありますが、これは真実とは言えません。小さな団体や個人でも国際協力はできます。募金や寄付金などの現場投入率は、大きな団体よりも、逆に小さな団体のほうが優^{すぐ}れているのでは、と思っています。

アジアチャイルドサポートの建設した学校では、今、一万人近くの子供たちが学んでいます。「命の泉」と銘^{めい}打った井戸の建設では、四万人以上の人々が安全な飲料水を手に入れることができるようになりました。食糧援助を続けているミャンマーのハンセン病施設に暮らす人々は百名を超え、カンボジアの地雷被害者などに対する障害者農業支援センターでは多くの人々が働き、モンゴルの児童保護施設には三十六名の子供たちが暮らしています。

これまでの活動により、アジアチャイルドサポートは五万人以上の人々の生活を支えています。とりわけモンゴルの児童保護施設やミャンマーのハンセン病施設に暮らす人々については、命を支えていると言っても過言ではありません。

「なぜ、この運動をやるのですか」

とよく聞かれますが、いつも返答に詰まってしまいます。

「誰かのため。貧しい国の恵まれない子供たちを救いたい」

などという大それた考えは一切ありません。

「見てしまったから。知ってしまったから」

としか言いようがありません。ただそれだけです。

一般的な概念の「誰かのため」というボランティア精神は、私にとっては最も遠いものかもしれません。

ただ「やりたいから、やっているだけ」です。

かつて日本も外国から助けられました

国際協力などの活動を行う小さな団体のリーダーは、身に降りかかる誹謗中傷^{ひぼう}を当然のこととして受け入れなければやっていけません。本当に凄まじい中傷や批判を受けます。最も多いのは「外国の子供に手を差し伸べる必要はない。日本の子供のことだけ考えろ」という批判です。「日本にも親のいない子供や貧しい家庭の子供がいる。遠い外国の子供より、足元の子供たちを助けるのが当たり前だ」という意見がとても多いのです。

この考え方に、私は反対です。なぜなら、私たち日本人も外国によって助けられた歴史があるからです。

第二次世界大戦の敗戦によって日本は徹底的に破壊されました。その結果、戦後、凄まじい貧困^{ひんこん}が国民を苦しめました。餓死者^{がし}もいっぱい出しました。そのときに、多